MUSASHINO for TOMORROW

Vol.142
Feb 2023

特別対談

夢心運——宿命と運命に彩られた相撲人生（後編）

宮城野親方｜元横綱白鵬
福井　直昭｜武蔵野音楽大学学長

卒業生インタビュー

かけがえのない武蔵野での学びと出会い

神農広樹｜新日本フィルハーモニー交響楽団 首席オーボエ奏者

ごあいさつ

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長

福井 直敬

皆様にはお元気で初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

令和５年は、コロナウイルス感染症の拡大、ロシアによるウクライナ侵攻の影響、また政治、経済、外交、防衛等々、多くの困難な問題が継起する中に始まりました。新しい年が、多少とも安寧に向かうことを心から祈念いたします。

本学園では昨秋、３年間の中断を余儀なくされた対面での「ミューズフェスティヴァル（学園祭）」を開催し、学生、生徒諸君が準備していた演奏や展示等を行うことができました。当たり前のことが困難であった学生同志の忌憚のない交遊を、心から楽しんだ数日でした。これを契機として、対面での授業が必須と言える個人レッスンはもとより、ほとんどの授業を対面で実施できました。聴講希望者の多い講義など一部オンラインも活用しましたが、これら多様な授業形態が学内に定着してきたのも、今後の授業編成に利するところが多いと考えています。

現在、どの大学も、学生の経済的負担軽減に腐心しています。本学も公財政からの支援に加え、返済義務のない独自の「福井直秋記念奨学金」の拡充に年々努力を傾けています。このたび、本学園では篤志家のご支援をいただき、学部卒業生、大学院修了生を対象に、特に秀れた成果を挙げた者、挙げつつある者を表彰あるいは奨励するために、建学の精神に因んで命名した「コンコルディア（調和・協調）奨学金」を新設いたしました。内容は、著名なコンクール、学会等での入選、入賞者、諸外国の秀れた特色ある教育機関での履修や研究の継続、優秀な楽団や教育研究機関への正規の採用者等でありますが、詳細については目下検討中であり、本年４月以降に要項を発表いたします。

本学園の女子寮は耐震改修こそ確実に実施してありますが、築50数年が経過し老朽化が目立ってきました。このたび、令和６年初春の竣工を目途に、江古田キャンパスから徒歩約３分の場所に新女子寮を建設し、入寮生の便宜を図ってまいります。快適な寮生活を保障し勉学の成果向上に資するために全室（バス、トイレ、洗濯機等付き）個室とし、寮棟内には練習室も備えます。

昨年、大学を設置するための教員組織、教育課程、施設・設備等の最低基準を定めた「大学設置基準」が改定されました。また学校法人のガバナンス強化を主たる目的に「私立学校法」の改定が今国会に上程され、令和７年の施行が予定されています。建学の精神を堅持し教育の方針に従って、学生諸君が学修目的に従い真摯に取り組むことができるよう、教育環境の充実に更なる努力を傾注してまいりますので、新しい年も一層のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

令和５年２月

本学ブラームスホール

特別対談
後　編

夢心運── 宿命と運命に彩られた相撲人生

第69代横綱 宮城野親方（元横綱白鵬）× 福井直昭（本学学長）

特別ゲスト：富山英明（日本レスリング協会会長・1984年ロサンゼルス五輪金メダリスト）

数々の大記録を打ち立て相撲界を牽引し、去る1月28日に断髪式を行ったばかりの元横綱白鵬 宮城野親方と、格闘技に造詣の深い本学 福井直昭学長との対談は、前号に引き続き本学園評議員でもある日本レスリング協会会長 富山英明氏（1984年ロサンゼルス五輪金メダリスト）をゲストに迎えた豪華なものとなりました。相撲の奥深さ・魅力から教育論に至るまで思う存分語り合った、高揚感とユーモア溢れる充実のスペシャルトークをお届けします。（2022年4月18日対談）

宮城野 翔 Sho Miyagino

第69代横綱。本名・白鵬翔（帰化前はムンフバト・ダヴァジャルガル）。1985年3月11日モンゴル・ウランバートル市生まれ。父はモンゴル相撲の横綱で国民的英雄。15歳の時に来日し宮城野部屋に入門、2001年3月場所初土俵を踏む。新大関の2006年5月場所、幕内初優勝。2007年5月場所後に横綱に昇進、以後土俵の内外で相撲界を牽引。幕内優勝回数45回などの5つのギネス認定記録を含む数々の大記録を残し、2021年9月に引退。年寄「間垣」を経て、2022年7月年寄「宮城野」を襲名。生涯戦歴：1187勝247敗253休。

心技体──8割が心

福井　親方は、さまざまな場面で、いわゆる「心技体」では心が大事だというお話をされています。

宮城野　心技体の中で、2割が「技と体」で、残りの8割が「心」だと思います。“相撲の神様”双葉山関は、心技体から「技」を外し、代わりに気持ちの「気」を入れて「心気体」と言ったんですね。技ではなく、気持ちがいかに大事かと。最大の敵は、自分の心に潜みます。それに打ち勝たないといけません。

福井　あらゆる史上最高記録を塗り替えてきた親方が挑み、超えられなかった唯一と言ってよい大記録が双葉山関の「69連勝」。イチロー選手や最近では大谷選手などもそうですが、不滅の大記録に近づいた時、過去の偉大な名前が歴史から引っ張り出されます。白鵬関の場合は、周りから似ていると言われ、自ら尊敬し研究もした「双葉山」という名前が、神棚から降ろされたわけです。

富山　63連勝までいったのに、稀勢の里に負けたじゃない。当時、相撲の神様の記録を外国から来た者に超えさせてはい

けないという雰囲気があったよね。

宮城野　記録がかかったのは、ちょうど九州場所だったんです（2010年11月）。双葉山関の出身の大分県宇佐市まで、車を出して行きました。お参りして、帰りに資料館に寄ったら、資料館の館長が人を呼んでしまって、もう何百人と来ちゃったんです。それで、帰りに車に乗る時に、「白鵬、双葉山関の記録超えるな～！」と言われて。その言葉が、ぐわーっと刺さった。

福井　地元の大英雄ですものね。

宮城野　はい。双葉山関は3年近く負けなかったわけじゃないですか。当時は1年に2場所だったですからね。それを年6場所の自分が1年足らずで超えていいものかなあと、自分でも思っていましたし、あと3、4日で場所が始まる時に「どうしよう」と思って大鵬さんに電話しました。「親方、こんなふうに言われてしまったんだけど…」と。そうしたら、「我々もその記録に挑戦した、でも果たせなかった。チャンスがあるんだったら、是非ともやってもらいたい」。それを聞いて、ちょっと落ち着きました。

富山　私は、同じ格闘家として分かるじゃない、充実した横綱が負けないのが。でも神様みたいに尊敬している人の記録に迫った時に、何かこう重くなったような気がした。やっぱり優しいから、何か葛藤が始まるんだよね。多分あそこで抜けきれなかったというのは、その辺の部分だったんだね。

宮城野　双葉山関が69連勝で、私が69代横綱なんですよ。

福井　それも奇遇ですね。

宮城野　この縁だけで、残りの相撲人生を頑張れると思えました。69というのは、凄く好きな数字ですね。3、6、9というのは、ミロク（弥勒）といってイイ数字なんです。

福井　古くから、世界中のあらゆる文化、宗教、建築、数学などで、3が重要視されてきましたよね。地球の自然や時の流れ、宇宙の法則などを紐解いていくと、ミロクにつながる。

宮城野　神の数字ですよね。まあぜひ先生のところも、ひとつの交流として宮城野部屋に来て朝稽古を見るというようなことをね。「十代の子たちがここまで頑張っているのだから、我々大学生はもっと頑張らないといけないな」と、そういう気持ちになるかもしれないです。で、音楽を練習する間に、ちょっと四股を踏むとかね。

福井　四股ですか？

宮城野　四股の意味って、日本人がいま知っているかどうか。四股を踏むことで地鎮したり、悪いものを追い払う。相撲というのはスポーツであっても、ご存じのように神事の部分が多く含まれた特別なものです。

福井　そういえば、私が小学校5年生くらいの時に、当時の協会理事長 春日野親方（元横綱栃錦）が、夏の巡業中に部屋を開放してくださり、3日間くらい通いで稽古させてもらったんですよ、まわし付けて四股踏んで。

宮城野　今もやっていますよ。

福井　今でもやっているんですか！ うちの息子たちは行ってない（笑）。

宮城野　うちの真羽人は、4、5年生で連続優勝して。

福井　確実に親方の遺伝子ですね。そんな素晴らしい血が流れているお子様たちのことはどう思われます？

宮城野　私だけではなく、父がいて、母がいて、ご先祖様がいて、今の自分がある。自分の力、才能だけではないです。

土俵で真の自分を知り
努力して運を引き込む

福井　相撲を何のためにやるのかというのは、自分の強さや弱さを知るためだと。

宮城野　丸い土俵は、レスリングのマットや音楽のステージも同じだと思うけれど、人間が試されているよね。悲しんだり、喜んだり。寂しかったり、笑ったり。一番の財産は、勝ち負けじゃなくて、真の自分を知ったことじゃないか、つくづくそう思います。

福井　土俵には全てがあるわけですね。私の好きな言葉で「人生で大事なのは喜怒哀楽の総量」というのがあります。要するに、「喜」と「楽」だけでは人生は味気ない。喜怒哀楽4つがたくさんあって、思い出と共に人生を豊かにしてくれるという。

宮城野　ある映画で、武術の達人同士が戦う前に、お茶を飲むシーンがあるんですよ。主人公と戦う相手が、「このお茶は美味しいお茶です、飲んでください」って。主人公は「茶は茶です。茶には優劣の差はない。なぜならば、茶はすべて自然の中で育ったものだと。心の中で美味しいと思って飲めば、美味しい筈だ」と。

富山　なるほど、深いね。

宮城野　そして「我々武術家も当然技量の差はあっても、優劣の差はない筈だ」と言うんです。我々も、取組を通して自分自身の真の姿を知るのだと思います。

福井　それが、勝ち負けを超越した「相撲道」なのでしょう。

宮城野　12年前に4場所連続全勝優勝という誰もできなかったことを成し遂げて、優勝インタビューで「私は運があった人間です。でも、運は努力した人間のところにしか来ないんじゃないか。そして、ひとつのことだけに集中してやっていけば、もちろんそれは素晴らしいことなんだけれど、それだけでは一番に、てっぺんにはならないんじゃないか」──そう言ったことがあるんです。色々なものに興味があり、たくさんの努力があるからこそ、運がその人にやって来るんじゃないかと。そういえば松山千春さんと会った時、「横綱、イイこと言ったな。運という漢字の意味、分かるか？」と言われ、「分かりません、教えてください」と答えると、「軍隊の軍、軍が走らないと運は来ないんだ」と。

福井　「しんにょう」は、走るという意味ですから、「軍」が「走る」ですね。そういえば手相占いのタレント、島田秀平さん知っています？ 2ヵ月くらい前に大学にロケにきたんですが。

宮城野　おーっ、お笑いの。

福井　そうです。私がアドリブで手相に話を振ったんですよ。そしたら、休憩で私の手相を見てくれたんですが、それが全部当たっていて。詳細は秘密ですが（笑）。その島田さんが、足を遠くに運べば運ぶほど、運は回ってくるんだという言い方をしています。「運」という字は「運ぶ」と読むからですね。

親方が部屋継承後初の開催となる「宮城野部屋千秋楽パーティー」にて（2022年9月25日）

宮城野　いずれにせよ、黙って座っているんじゃ、運は来ないということですね。

日本相撲協会提供

進退を賭けた場所で、不知火型の横綱土俵入りをする白鵬関。
左は露払い石浦（2021年7月14日 ドルフィンズアリーナ）

福井　芥川龍之介は「運というのは偶然ではなく必然だ」と言っているし、サッカーのジーコも「人は幸運の時は偉大に見えるけれど、成長しているのは実は不運の時だ」だと。

2度味わった目に見えない不思議な力

宮城野　目に見えない不思議な力というのを、実は10年間で2回味わいました。私は、東日本大震災が起きた日と同じ、3月11日生まれなんですが、震災の3ヵ月後、8日間で10ヵ所、慰問して巡りました。最初は岩手県の山田町で、前日に乗り込んだんですけど、眠れないんですよ。余震で携帯のアラームが鳴るじゃないですか、「地震です！」って。で、寝不足のまま土俵入りしました。そうしたら次の日、山田町の担当者から電話がありました。「横綱が土俵入りしてから、余震が1回もなく、ぐっすり眠ることができました」と。

福井　それは、人知を超えた力ですね。

宮城野　土俵入りし四股を踏むことで、先ほど話したよう、邪気が払われ、大地の荒ぶる神を抑えられたのではないかと思います。大相撲というのは、赤い糸じゃないですけど、目に見えないもので、この国、或いは何かと繋がっているのだなと確信した瞬間でしたね。神がかった話をしているようですが、不思議なもの、目に見えないもの、そういったものを含めた大きな世界の中で生かされていることを知り、畏怖の念を抱くことも、自分の心を整える上で大切なことだと、私は感じています。そして、もう一つの不思議な出来事は、最後の名古屋場所の時のものです。

福井　最後の場所で45回目の優勝、しかも全勝した昨年の7

月ですね。

宮城野　千秋楽の朝に、とんでもないものを見ちゃったんですよ。あと5時間後に全勝対決の大勝負が待っているわけじゃないですか。朝稽古の時に、トヨタスポーツセンターの端にあるうちの相撲道場に、ドアから真っ黒な蝶が入ってきたと思い、でもよく見たら蝶ではなくトンボだったんです。黒いトンボ、見たことあります？

福井　いや、ないです。

宮城野　ゴルフ場とかで見るトンボなんかとは違うんです、飛び方が。こりゃあ珍しいものを見たなと。で、朝稽古が終わって調べたんですよ。そうしたら、ハグロトンボというトンボだったんです。

福井　羽黒山（昭和初期の横綱）じゃなくて（笑）？

宮城野　学長、詳しいですね（笑）。ハグロトンボは、青森とか新潟の川のきれいな所にしか出てこなくて、もう絶滅に近いらしいです。そして、最後に書いてあったのが、「神の使者」。

福井　へぇー。黒猫を見たら不吉って言うけれど…。神の使者か。たしかに、長渕剛さんも歌ってますね、「ああー幸せのとんぼよー」って（笑）。

宮城野　普通のトンボはこんなふうに羽を広げたまま止まるじゃないですか。ハグロトンボは、合掌するように羽を閉じて止まるんです。録画してあるから見てください（と言って、自分のスマホをみせる）。

福井・富山　「わー、本当だ！」

宮城野　よーし、と思うじゃないですか。それで風呂入って、ちゃんこを食べている時、今度はでっかいヤモリを見たんです。1ヵ月半くらいそこにいたのに、それまでは小さなヤモリすら見てなかったんですよ。でも、その朝にでっかいのが…。

福井　2匹目の使者ですね。

宮城野　勝った後に思い出しました、「ああ、朝いたな…」と。

現役最後の一番の感動秘話

福井　目標の二桁を達成した10日目に、実は引退を決めておられたと。

宮城野　そうなんです。師匠とか家族とか、部屋の皆さん、裏方さんに言いました。それ以外は、誰も知らないです。そして千秋楽を前に、ある人に「みんな断髪した後に、土俵に感謝の気持ちを伝えている。だから、横綱は土俵に上がる前に感謝の気持ちを伝えて」と言われたんです。で、呼び出しさんから四股名を呼ばれた時、こう蹲踞（そんきょ）して土俵に頭をつけました。

福井　感動的でした。

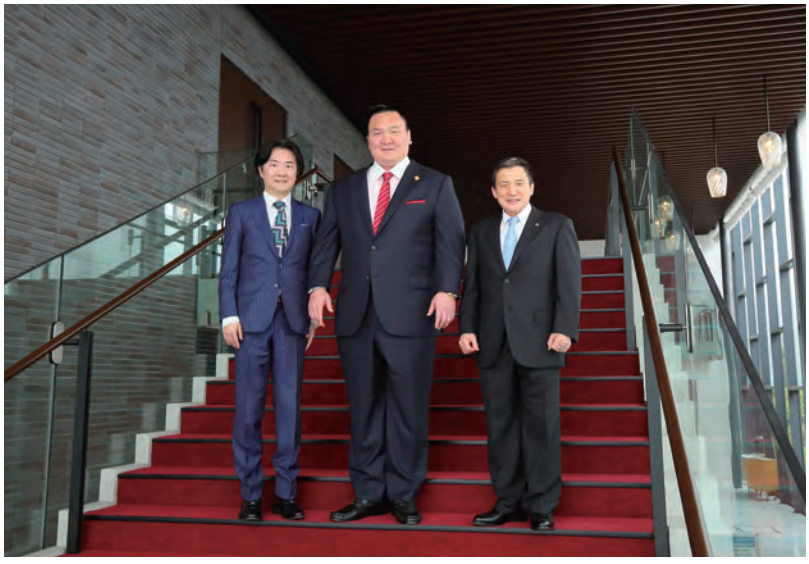
宮城野　「20年間ありがとうございました。この一番だけ力をください」と。土俵に上がった瞬間、20年間で初めて緊張しなかった。すーっと抜けるというのか、どうなってもいいという感情の中に、光がうっすらあるような。勝てばその光が輝きますから。目つき、顔つき、身体つきも、そうなるんだろうね。で、勝った後に、爆発しちゃって。ちょっと叩かれましたけれど（笑）。

富山　ははは、なるほどね。分かるな（笑）。

福井　雄叫びつきのガッツポーズね（笑）。

宮城野　20年間で初めてですよ、ああいう心境、感情になったのは。

福井　そこまで書いてあるインタビューもないですね。有難うございます。昔、巨人の桑田真澄投手が手術を経て久々に復活した時、マウンドに腕をつけたことあったじゃないですか。あれは再生だけれど、親方の場合は、もうこれが最後だということで土俵に額を。実



本学ブラームスホールホワイエにて。宮城野親方「内閣の組閣写真みたいだね（笑）」

にいい話を伺ったので、私は、これからはあの映像を見て何杯でもお酒が飲める。もう最高(笑)。

宮城野　富山さん、とんでもない夢を見たじゃないですか。最後の場所前に。

富山　そうそう、私、電話したんだよね。夢の中で横綱が優勝するんですよ。優勝してパーティーやっているんですよ。

宮城野　しかも、全勝優勝！

福井　正夢ですね。

宮城野　あの時は６月で、まだ自分なりの稽古ができていなかったんです。でも、ものすごく嬉しかった。

富山　何かが知らせるんだろうね。不思議だったね。

日本相撲協会提供

現役最後の場所13日目高安戦。この2日後全勝により45回目の優勝を決め、自らの花道を飾る
(2021年7月16日ドルフィンズアリーナ)

福井　以前、富山先生に伺った「夢でも勝つ」というお話。本番を想定してシミュレーション＝イメージトレーニングをする。不思議なもので本番の１ヵ月くらい前までは相手と接戦しても負けてしまうという夢を見るが、順調に調整が進むと、１週間くらい前くらいから今度は勝つ夢に変わる。私も、たまにコンサート直前なのに全然間に合っていない夢を見ます(笑)。夢までコントロールするというのは、やはりそれだけ練習して自信を持っていかないと、できないですよね。

宮城野　最後の名古屋場所の14日目大関正代戦。もし負けたら、千秋楽で全勝の新横綱照ノ富士に二番勝たないと優勝がない。二番は難しいけど、一番だったら何とかなるという自信があるから、とにかく正代戦は落とせないと。ある意味、千秋楽の取組より14日目の方が緊張感があった。でも、どんなにシミュレーションしても、正代には勝てないんですよ。本当はやりやすい相手なんだけど直近の場所で負けているし、自分は膝が悪いから思い切り立ち合いができない。夜も眠れないので睡眠薬を飲んで、それで朝起きたらトレーナーの大庭先生たちが来て、「横綱、立ち合い決まりましたか？」と。その時の言葉が、「決まった。今日は当たらない」。それで、立ち合いで仕切り線から下がったんですよ。ひとつ、ふたつ、自分が歩いて下がっていくんです。そうしたら、正代が動揺してね、目が左右にすごい勢いで…人間の黒目って、あんなに速く動くって知らなかった(笑)。

福井・富山　(大爆笑)

宮城野　そこで、もらったと思いましたね。

個性的で義理人情に溢れた弟子を育てたい

福井　指導者になられて、どのように、そしてどのような弟子を育成したいですか。

宮城野　医師に、次にケガしたら人工関節だと言われました。引退した理由のひとつは、今後弟子たちを教えるのに自分の身体が丈夫じゃないといけないから。千代の富士さんがまだご存命で60歳くらいの時に、「常にまわしを締めることだ」と。なので、今後もまわしを付けてやっていきたい。そして、例えば、魁皇関が右を取った時や千代大海関が突っ張った時に会場が湧きましたよね。そういう絶対的な型を持ちながらも、義理と人情を備えた力士を育て、相撲界の発展に尽くしたいですね。

福井　それはもう、白鵬二代目ですよね。

富山　音楽とか芸術の世界には勝ち負けはないけど、観て聴いている側が判断するじゃないですか。私、絵を最近興味があって見るんだけどね、素人には分からないわけです。だけど、惹きつけられるものってある。音楽もそうですよね。全然知らなくても、聴いているだけで涙が出てしまうという。スポーツも、勝っても負けても感動を伝えられるような試合というのをしないといけないんですよね。

福井　やはり白鵬、朝青龍という力士は華があり個性的で、人間的な魅力・サービス精神に満ち溢れ、自分の意見を世の中に伝えることに優れていた。そういう意味では、現役力士ももっ

銀座にある「鵬 -HO-」で、横綱の強さの源になったちゃんこ鍋を頂く。元力士で店主の岩崎悟さんは、四股名「白鵬」の名付け親。福井学長「さっぱりかつ深みのあるスープのこだわり鍋は、心も体も温まります」

と発信力を増して欲しいというか。

宮城野　色々な個性があった方がいいよね。

富山　そうですよ。本当に。

人生は木と同じ──
型を持って、型にこだわらない

福井　学生たちへ、メッセージをお願いします。

宮城野　とにかく何にでも興味を持つこと、たくさん夢を持つことですね。私は15歳で日本に来た時、父と一緒の横綱になりたいという夢を持っていました。その夢を22歳で叶えてしまった。22歳と言えば、ちょうど大学4年生の歳ですよね。叶えてしまった時に、夢と目標を失うという悲しさ、寂しさがあった。じゃあ、今度はどうしようか。そうすると、相撲だけじゃなくて、色々な興味を持ち新たな夢を持つことが大事なんだと気づきました。最近、若い子にうるさく言っているのは、まず「型」を作ること。型も何もないのに色々やっても駄目なんです。

福井　それは「型破り」ではなく、単なる「型なし」ですね。

宮城野　そして型を作った後は、その型に「こだわらない」ようにしなければいけない。

福井　武道、芸道、芸術における「守破離」ですね。

宮城野　私の相撲の型は、右四つ、左上手。でも、はまらない場合にどう対処するか、それを模索していくのです。

福井　そういえば、今も拝見していましたが、親方の右耳は、右四つが得意なので立ち合いで相手の頭で強烈にこするため、カリフラワー耳になってらっしゃいますよね。柔道やレスリングの選手が、寝技の時、畳やマットでこするからなるという。

宮城野　うちの父は耳がきれいなんですよね。どうしてそんなに耳がきれいなんだと聞いたら、「強いからだ」と（笑）。

福井　ははは。

宮城野　この「型を持って型にこだわらない」とうのは、人生も同じ。人生というのは、木なんです。木にはしっかりと根があるわけじゃないですか。相撲というのは私にとって絶対のベース、木の根っこなんですね。これは誰からも奪われることはない。だから、これが私の型なんです。そこから木が生え、たくさんの花を咲かす。人生は長いようで短いと思うし、音楽という根っこを作った上で、色々なものに興味を持って、もちろん音楽の世界でたくさんの花を咲かせてもらいたい。頭で考え、心で描きながら、日々頑張っていけば、夢というものは必ず叶うものだと。

福井　まさに私が常日頃、学生に話していることです。遊ぶことも大切なんだけれど、まずは自分に厳しく鍛錬をしてほしい。でも最後は結局、人と人だから。音楽しか知らないと、自分自身の幅や可能性、そして自分の周りの世界が広がらない。やはりどんな人とも話せる方が、色々な仕事も回ってくる。また、世の中の人が興味を持つものには必ず理由があるので、あらゆることに関心を持てば、自ずと感性・人間性が磨かれるのだと思います。

宮城野　その通りだと思います。

福井　今日お話を伺って、親方の言葉の数々には、偉大な先人たち、特にお父上に対する尊敬が通底しているように強く感じました。そして偉大なる家系に生まれた宿命と運命、成ったものしか分からない横綱としての矜持と孤独感。私の曽祖父がこの武蔵野音楽大学を創立しました。一緒にしては失礼ですが、私も親方と同じように、曽祖父や父に恥をかかせないように精進してきたつもりです。そして、2年前に学長になりました。少なからず重圧もある中、今日はとても勇気づけられました。心より感謝申し上げます。

宮城野　こちらこそ、ありがとうございました。

本学ベートーヴェンホールにて

楽器ミュージアムレター

コロナ禍における楽器ミュージアムの学芸員実習

博物館の仕事というと、一般には開館の受付や見学者への案内などをイメージされる方が多いかもしれませんが、実はこのような一般の方に見える業務というのは、全体のごく一部でしかありません。他に資料の受入や分類・整理、保存、展示、調査研究、教育普及活動など、博物館業務の範囲は極めて多岐にわたっています。そして、次世代を担う学芸員を養成する学芸員実習の受け入れもその一つです。

武蔵野音楽大学には、すべてのコースで履修できる学芸員課程があり、楽器ミュージアムでは、毎年学芸員実習を実施しています。学芸員実習は、実物資料に直に触れながら、実務体験ができる貴重な学びの場で、座学を中心とした講義では得られない枢要な機会であると言えます。「楽器の計測」や「標本台帳づくり」、「楽器点検」や「展示室の清掃」、各自のテーマに基づいた「楽器の解説パネルづくり」、「写真撮影の知識と体験」、「企画展示の検討」、「展示づくり」など、実践的な学びを通して、学芸員が担う業務の幅広さについて理解を深めてもらいたいと考えています。

しかし昨今のコロナ禍で、楽器ミュージアムも大きな影響を受けました。多くのミュージアムでは、学芸員実習もオンラインやハイブリッド形式が余儀なくされましたが、幸い、本学の楽器ミュージアムでは、受け入れ人数が他館ほど多くないこともあり、「3密」を避ける工夫をして、対面で実施いたしました。それは図らずも、学生側にとっては、従来よりも少人数で資料にじっくり向き合う機会となりました。実習を終えた学生からは、歴史的楽器という文化財に実際に触れる経験を通し、学芸員という仕事に魅力を感じたという声や学芸員の業務の幅広さについて実感したという声が多く寄せられました。

No.57

音｜楽｜の｜万｜華｜鏡｜

薦田治子（本学音楽学教授）

日本音楽のピリオド楽器

日本のクラシック音楽の世界でも、ルネッサンス時代やバロック時代などの古い音楽が「古楽」とよばれて演奏されるようになって久しい。ロンドンでは、早くも1726年に、古楽アカデミーが設立され、フランスでも19世紀前半から古楽への関心が高まり、また、メンデルスゾーンの《マタイ受難曲》の再演（1829）はドイツの古楽復興のシンボルとして語られる。19世紀末以来の音楽学の発展に伴い、楽譜、楽器、演奏法、音楽理論、演奏の場などについて、精緻な研究が積み重ねられ、近年では、そうした研究成果を反映した演奏会も少なくない。さらに、モーツァルトやベートーヴェンといった古典派以降の作曲家の作品も、ピリオド楽器による演奏が試みられるようになってきている。ある意味で、同じ作品でも、モダン楽器、ピリオド楽器と、多様な楽しみ方ができるようになったといえる。

名工康光作の箏（1844年頃）。龍角上の弦の下には白い「枕芯」が見える（本学楽器ミュージアム所蔵）

日本には、古い音楽がたくさん残されているが、「古楽」との決定的な違いは、日本では演奏伝承が途絶えることなく今日まで伝えられてきたということであろう。その意味では、モーツァルトやベートーヴェンのモダン楽器による演奏法の状況に近い。ただ、演奏され続けてきた期間が非常に長いので、その変化の幅も大きく、その様相も多様であったはずである。

最近数十年ほどをとってみても、三味線は、広いコンサートホールで大きな音が出るように、棹が太くなり、胴の板も厚くなり、またよりクリアな音色を求めて皮の張り方が変化し、動物愛護の観点から皮の素材も変化してきている。箏は、切れやすい絹糸弦をやめて、テトロン弦やナイロン弦が一般的となり、弦を支える龍角の上の紐状の「枕芯」も象牙やプラスチックといった固い素材の「枕角」にほぼ変わりつつある。しかし、その日本音楽の世界でも、最近ピリオド楽器への関心とでもいうべき動きがみられるようになってきている。古い皮の張り方を取り入れた三味線や、絹糸弦を用いた箏の演奏会が行われ、往年の名工の箏を再度響かせる試みも見られる。モダン楽器とピリオド楽器両方が楽しめる時代になりつつある。

かけがえのない武蔵野での学びと出会い

神農広樹

新日本フィルハーモニー交響楽団 首席オーボエ奏者

神農広樹 Hiroki Shinno

1993年静岡県磐田市出身。静岡県立浜松西高等学校卒業。2015年武蔵野音楽大学を卒業の後渡独、トロッシンゲン音楽大学大学院を最優秀の成績で修了。トロッシンゲン音楽大学院修了後帰国、同時に兵庫芸術文化センター管弦楽団入団、在団中に音楽監督佐渡裕氏推薦によるリサイタルシリーズ出演。新日本フィル、東京ニューシティ管、浜松交響楽団等とソリストとして共演。第91回日本音楽コンクールオーボエ部門第2位。現在公益財団法人新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者。

武蔵野音大が好きで、本誌の愛読者でもあるという神農さん。昨年は、日本音楽コンクールの入賞、オーケストラへの入団と飛躍の年となられました。今回のインタビューを受けることをとても喜んでくださり、武蔵野時代のこと、現在の仕事のことなど、すべてが武蔵野と繋がっていると熱く語ってくれました。（2022年12月7日インタビュー）

多忙のなか挑んだコンクール

―― **この度は、第91回日本音楽コンクール（毎日新聞社、NHK共催）オーボエ部門 第2位を受賞されました。おめでとうございます。**

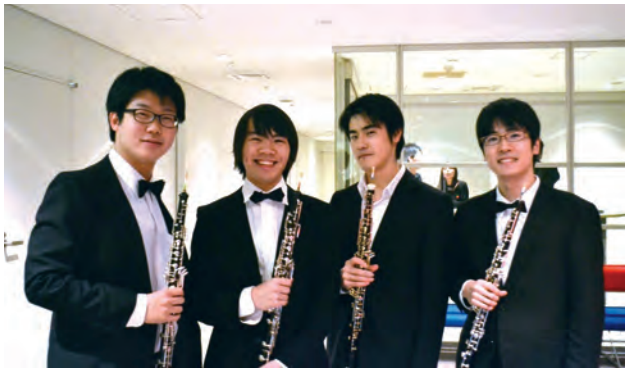
神農　有難うございます。演奏や準備の過程の反省はありますが、歴史あるコンクールで本選まで残り演奏できたことが嬉しかったし、2位をいただいたことも大変光栄なことだと思っています。

―― **コンクールを受けようと思ったきっかけをお聞かせください。**

神農　ここ数年、仕事と重なり受けるチャンスがなかったのですが、今年（2022年）は奇跡的に日程を空けることができました。すでにオーケストラ団員としてキャリアを積んでいるため、結果次第では楽団に迷惑をかけるかもしれないというリスクがありましたが、年齢的にも参加要件ぎりぎりで受けられるということも後押しになり、思い切ってチャレンジしました。

―― **本選を迎えるまでに、どのような準備やご苦労がありましたか？また、コンクール当日の様子はいかがでしたか？**

神農　仕事がすごく忙しくてとにかく時間がなく、リハーサルなどの合間をぬってコンクールの練習をしました。学生の頃は、コンクールがその年の一番大事な本番でしたが、今は毎日、本番が続いている状況ですのでわりと平常心でコンクールに臨めたと思います。特に本選は自分で選曲したプログラムだったので、音楽に集中できました。それに最終ラウンドになると他のコンテスタントの方と顔見知りになり、純粋に音楽家同士としてどんな演奏をするのかなと聴いていたので、わりとリラックスしていましたね。



武蔵野音大管弦楽団演奏会にて（2014年）

―― **武蔵野に入学するまでの神農さんの音楽歴をお聞かせください。**

神農　オーボエは10歳の時に父から勧められて始め、地元のジュニアオーケストラに入っていましたが、その当時は趣味の範囲で楽しく吹いていました。中高一貫の進学校に通っていまして、このまま進学するか音楽の道に進むかを考えた時、“音楽”は自分で100%コントロールできるものではなく、思ったようにいかないからこそ魅力があるものなんだと思い、音楽の道に決めました。この世界の厳しさを知った今は、昔の自分に「絶対音楽をやった方がいいよ」とは言えないですけどね。

楽しく充実していた武蔵野時代

―― **学生時代を振り返って特に印象深かったこと、現在に活かされていることなどをお聞かせください。**

神農　武蔵野在学中はとにかく楽しかったです。私の学年はオーボエの学生が多く、お互いに切磋琢磨しながら4年間を過ごしました。特に私と同じ2022年に東京交響楽団に入った浦脇健太さんとは大学の寮も一緒で、留学先も一緒。いつもオーボエの話ばかりしていました。先生方にも恵まれ、主科担当の青山先生はもちろんですが、当時いらした北島 章先生、伊藤量子先生、北村貴子先生は皆さん武蔵野の卒業生で、いろいろお世話になりました。伊藤先生には、ミュージカルなど自分が経験したことがない仕事にどんどん連れて行っていただき、そこで働き方を勉強させていただきました。あとは演奏以外にも語学や一般教養の授業が好きで、取れるだけ履修していました。武蔵野ではさまざまなことを学ぶことができて、社会に出た時に本当に良かったと実感しています。

―― **その後、ドイツに留学され研鑽を積まれました。**

神農　ドイツ留学は、青山先生と客員教授だったインゴ・ゴリツキ先生に勧められ、最終的に学位を取得しておいた方がよいとのことで、

トロッシンゲン音大の大学院を修了しました。音楽の世界において、ドイツでは日本人である自分はマイノリティでした。でも、弱い立場に置かれることによって見える景色が変わってきて、自分のことばかりやっていていいわけじゃないと気づいたことが一番の収穫でしたね。オーケストラの中でも同じことだと思うのです。そんな大事なことも留学したからこそ学ぶことができたと思っています。

首席奏者に求められること

―― 2022年5月、新日本フィルハーモニー交響楽団に首席奏者として入団されました。入団までの経緯をお聞かせください。

神農　ドイツ生活が3年経ったころ、佐渡 裕さんが芸術監督をされている兵庫芸術文化センター管弦楽団（PAC）のオーディションがタイミングよくありました。大学院を修了する年の夏からの契約で、ラッキーなことに帰国した瞬間からオーケストラの仕事に就くことができました。このオケは、他のオーケストラに人材を供給するための良い奏者を育てることを目的としていて、オーディションに行く時にも補助が出ます。プロのオーケストラとしても活動し、お給料も出ます。私はここに2年間在籍した後、オーディションを受け、今の新日本フィルに入りました。

オーケストラの首席選びはすごく大変で、楽団としては演奏技術だけでなく人間的にもフィットする人を希望しています。奏者もそのオーケストラの欲しい音を研究して演奏します。新日本フィルのオーディションはブラインドで行われ、音だけで判断されて入団が決まりました。

―― 首席奏者としての役割、活動内容、演奏する際に心がけている点、モットーは?

神農　首席の役割ですが、新日本フィルの場合センターラインと呼んでおり、指揮者とコンマスがいて、次の大事なラインが木管楽器の前列の私とフルートの首席の列なんです。指揮者の指示を一番キャッチしやすいのは弦楽器なんですが、大勢いるので意思の統率が図りきれない時もあります。そこでど真ん中にいる自分が中継基地の役割を担い、方向性をもう一度決めます。私がその人たちよりも早く音を出してあげると、みんなが安心して出てこられるようになるんです。

リーダーシップも必要ですが、調整する中間管理職的な役割、渉外的な役割が多いかなと思います。自分をしっかり持っていることと、他の人の意見をしっかり聞けることが大切ですね。ベテランの団員たちもまとめなくてはいけないため、20代の私が先輩たちにNOと言えるかというところが難しいのですが、そこは普段から良い関係を保つなど努力しています。これも首席の責任のある仕事の一部です。あ

新日本フィル第九公演（2022年12月）　指揮：佐渡 裕

新日本フィルでの様子

とはメンタルの強さが必要だと思いますが、そこに関しては適正があるのかと思います。

そのような中で心がけていることは、全体を優先すること。もちろん私自身、一番美しい音を出す努力をします。その上で自分がうまく聴こえるかではなくてオーケストラのために吹けるかどうかですね。その工夫を限界まで重ねた結果、自分の色がにじみ出てくると思っています。

―― 印象深かった演奏会や指揮者は?

神農　公演が終わると反省ばかりなんですが、そんな中でも、首席の役割を分かってくれる指揮者がくると印象に残る演奏になりますね。シャルル・デュトワ氏がいらした時は、オーケストラがどのように成り立っているのかが良く分かっている方でしたので、役割、方向づけがはっきりしています。厳しいリハーサルでしたが応えがいがあるというか、さすがに巨匠だなと思いました。

自らのポジション適正を意識する

―― プロの演奏団体で活動するには何が重要だと思いますか?

神農　オーケストラでは、演奏技術とは別に役割の適正が問われるのですが、私と浦脇さんがいい関係だったのは、私はどちらかというと首席のポジションが合っていると言われて、浦脇さんは支える方が得意だったからです。ポジション適正に早いうちに気づくことは、オーケストラに入団する際に、とても大事なことです。あとは、自分だけではなくて、隣の人とどれだけ美しいものが作れるかを考えられるプレイヤーでなければいけないと思います。先ほども申し上げましたが、演奏の技術プラス人間性が大事です。協調性と広い世界を持っている人のほうが良いと思います。

―― 武蔵野の後輩たちへのメッセージをお願いします。

神農　社会に出ると、想像していた以上にいろいろなジャンルで活躍している先輩たちがたくさんいらっしゃって、自分たちの活動を応援してくれるのを感じる機会が多くあります。この間も都響に呼ばれて行ったときに、トランペットの岡崎耕二先生とご一緒させていただきました。先生も卒業生で、都響の首席奏者として活躍されていますが、ここでも「君、武蔵野なんだよね」と温かく受け入れてくださって。こんな時に武蔵野音大で良かったなと思います。武蔵野は、専攻に関係なく同じように音楽を愛していて、同じ熱量を持っている学生がたくさん在学している大学だと思います。社会に出ても繋がっていられる仲間を在学中に見つけてほしいと思います。

―― 今後の活動、抱負をお聞かせください。

神農　私が新日本フィルで就いたポジションは、看板奏者といいますかオーケストラの顔でもあるので、「神農に任せたら安心だね」という期待を裏切らないように、またそれを超えるものを提供し続けたいと思っています。そして自分も卒業生として活躍して、後輩たちを温かく見守り導いていける存在でありたいと思います。

グレッグ・ニェムチュク ピアノ・リサイタル

ポーランドのピアニスト、シレジア大学教授のグレッグ・ニェムチュク氏のリサイタルが、10月5日ベートーヴェンホールにて行われました。

プログラムはオール・ショパン。「若き日のショパン」と題された前半では、ポーランド時代の作品として、初期の《マズルカ》数曲と《パガニーニの主題による変奏曲》、《ロンド》が取り上げられました。「作品に綴られたその人生」をテーマとした後半では、《タランテラ》、《スケルツォ 第2番》と続き、プログラムの最後は《バラード 第1番》の華麗な演奏で締めくくりました。ショパンの作品に造詣の深い氏ならではの解説は大変興味深く、また、ショパンへの愛情と共感に満ちた説得力のある演奏で聴衆を惹きつけました。

オレグ・クリサ ヴァイオリン・コンサート＆公開講座

10月21日、ブラームスホールにてイーストマン音楽大学教授のヴァイオリニスト、オレグ・クリサ氏によるヴァイオリン・コンサート＆公開講座が開催されました。

最初に、氏が師事されていたヴァイオリン界の巨匠ダヴィッド・オイストラフにまつわる話も交えてレクチャーが行われ、その興味深い内容に学生を始め聴衆の皆さんは熱心に耳を傾けていました。続くマスタークラスでは、ヴィルトゥオーゾコースの学生がモーツァルトの協奏曲を演奏し、奏法はもちろんのこと、曲に対するアプローチや身体の使い方などを緻密に指導していただきました。

後半のコンサートでは、ブラームスの《ヴァイオリン・ソナタ第3番》、ヴィエニャフスキの《スケルツォ・タランテラ》が披露され、確実な音程と明快な弓さばきで聴衆を釘付けにしました。

イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル

11月24日、イリヤ・イーティン客員教授によるピアノ・リサイタルがベートーヴェンホールで開催されました。今回のプログラムは、教授がこれまであまり取り上げていなかった作曲家の作品で構成された興味深い内容で、多くの聴衆が集いました。

前半のバッハ《半音階的幻想曲とフーガ》では、歴史的な奏法を取り入れた自在な表現が展開され、フーガでの見事な多声的表現と終結に向けての盛り上がりが聴き手を惹きつけました。続いてグリーグ《抒情小曲集》より11曲が取り上げられ、選曲の巧みさと音色の多彩さによって、会場は北欧の風景に満たされたかのようでした。

後半では、大作であるブラームス《ピアノ・ソナタ第3番》が演奏されました。全5楽章による傑作が、高度なテクニックと詩情豊かな響きで奏でられ、大きな感動が会場を包み込みました。

日々の研鑽が光った 学生による３つのステージ

11月17日、トッパンホールにて「ニュー・ストリーム・コンサート47～ヴィルトゥオーゾコース演奏会～」が開催されました。プロの演奏家を育てる“ヴィルトゥオーゾコース”から選抜された学生が、日頃の研鑽の成果を発揮し大変素晴らしい演奏会となりました。

続く11月25日には、オーディションで選ばれた学生による「オペラ選抜クラス試演会」がブラームスホールで開催されました。昨年に引き続き、美術、衣装などに感染防止対策を施した上での上演で、演出には音楽表現、演劇の基本を学べる工夫がされました。

受講生は、佐藤美枝子教授・佐藤正浩特任准教授、（音楽指導）、岩田達宗特任准教授（演技指導）のもとで研鑽を積み、モーツァルト《フィガロの結婚》を中心に１年間の学修の集大成として発表しました。

12月9日には、音楽総合学科アートマネジメントコースによる企画制作公演「Voyage de rêve ～ピアノで紡ぐフランス映画の世界～」がブラームスホールにて開催されました。サン＝サーンス、サティなどが作曲した映画音楽を、作曲コース専攻学生、大学院生が編曲し、当時の珍しい映像に合わせて演奏しました。照明による演出効果も高く、会場は大きな拍手に包まれました。この経験は、芸術的感性とマネジメント能力を備え、舞台芸術の現場で活躍できるアートマネジャーを目指す学生たちにとって、大きな力となることでしょう。

円光寺雅彦氏の指揮による管弦楽団演奏会

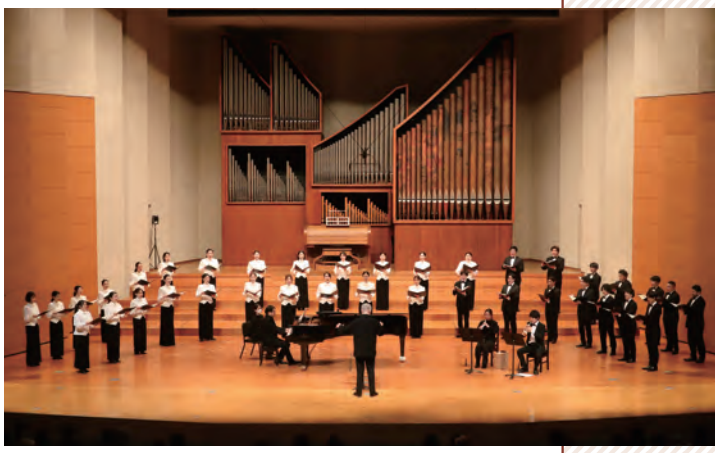
管弦楽団演奏会が12月1日、東京オペラシティコンサートホールにて開催されました。東京フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団などで長年にわたり指揮者を務められたほか、国内外で数多くの楽団を指揮されている円光寺雅彦氏との共演で、北欧の二人の作曲家の作品を取り上げました。

円光寺雅彦氏

プログラム前半は、グリーグ《ペール・ギュント》第１組曲、第２組曲。「朝」「ソルヴェイグの歌」などの名曲が表情豊かに演奏されました。

後半は、民族的な響きとスケールの大きさが共存する大曲、シベリウス《交響曲第２番》。学生たちは、指揮棒を使わず全身で語りかけるように指揮をされる円光寺氏の音楽を見事に体現し、躍動感あふれる演奏に会場から惜しみない拍手が送られました。

パワフルに華やかに、室内合唱団演奏会



12月7日、ベートーヴェンホールにて室内合唱団演奏会が開催されました。片山みゆき講師指揮による《グレゴリオ聖歌》では見事な旋律美を表現、ブスト《アヴェ・マリア》、信長貴富編曲《コルシカ島の２つの歌》では、さまざまな辛い歴史を持つコルシカ島で歌い継がれてきた民衆の歌を、当地の力強い訛りやこぶし等をそのまま活かして演奏しました。

栗山文昭特任教授指揮によるヴィヴァルディ《グローリア》では、ピアノの齋藤誠二さん（研修員）、オーボエの村田真理子さん（大学院2年）、トランペットの濱欠直毅さん（卒業生）と共演し、華やかに歌い上げました。林光編曲《日本抒情歌曲集》は、日本人が古くから慣れ親しんできた名曲を、合唱用に編曲したもので、懐かしいメロディーが、合唱ならではのハーモニーによりダイナミックに演奏されました。アンコールの宮澤賢治詩・作曲、林 光編曲《星めぐりの歌》では、舞台上に夜空に輝く星を表現し、透明感あふれる繊細な歌唱で観客を魅了しました。

吹奏楽の名曲を奏でたウィンドアンサンブル演奏会

12月13日、ウィンドアンサンブル演奏会が、東京オペラシティコンサートホールで開催されました。指揮者に、今回２度目の招聘となる、パシフィックフィルハーモニア東京音楽監督、東京佼成ウインドオーケストラの首席客演指揮者など国内外で活躍中の飯森範親氏をお迎えして、R.ヴォーン・ウィリアムズ《トッカータ・マルツィアーレ》、ジェイガー《シューマンの主題による変奏曲》、バーンズ《パガニーニの主題による幻想変奏曲》、《交響曲 第２番》など吹奏楽の名曲を披露しました。メンバー全員がやる気と向上心を持ち、飯森先生の熱く的確なご指導に応え、これまでに培ってきたアンサンブル力を存分に発揮した見事な演奏を披露しました。客席からの大きな拍手に笑顔で応え、アンコールにL.アンダーソン《クラリネット・キャンディ》、《そりすべり》の2曲を演奏し、令和４年度の演奏会シリーズを明るく華やかに締めくくりました。

飯森範親氏

3年ぶりに対面で ミューズフェスティヴァル開催

第70回ミューズフェスティヴァルが、「繋がり ～人の輪・時代、音楽と共に～」をテーマに10月29日、30日に江古田キャンパスにおいて3年ぶりに対面で開催されました。感染拡大防止対策を徹底した上で一般の方にも公開され、両日とおして1,500名を超える方にご来場いただきました。

本祭に先立つ28日の前日祭では、華やかなファンファーレ、実行委員長と学務部長の開会の挨拶に引き続き、8つの有志団体による楽しいパフォーマンスや演奏が繰り広げられ、大いに盛り上がったステージとなりました。

今回のミューズフェスティヴァルはコロナ禍における新しい形として“演奏”をメインに企画され、学生有志による45団体が、日頃の研究成果を披露しました。

さらに本学講師の春原恵子先生による招待演奏、フルートオーケストラと管弦楽団の演奏が華を添え、多くの聴衆を楽しませました。また、13のクラブや授業団体の展示、公演も賑わいを見せ、「ハロウィン縁日」や学内施設をクイズ形式で巡る新企画では、ご家族でゲームを楽しんだり写真を撮ったりするなど、参加してくださった方の笑顔が溢れていました。

ひとつひとつが今後の糧となった高校生たちの秋の行事

附属高等学校では、今年度より武蔵野音楽大学ミューズフェスティヴァルに参加し（10月29日、江古田キャンパス　ベートーヴェンホール）、日頃の授業で学んだ成果を発表しました。附属高校生にとって初めてとなるベートーヴェンホールでの演奏でしたが、生徒たちはメンバー同士で積極的にコミュニケーションをとり作り上げてきたピアノ・デュオ、重唱、アンサンブル等を堂々と披露しました。生徒たちは演奏技術の向上はもちろんのこと、一丸となって取り組んだセッティング運営やプログラム作成などをとおして、演奏会を開催するまでの過程も学んだことでしょう。

11月下旬には、2年生の修学旅行を実施しました。初日は、紅葉が大変美しい京都の金閣寺、二条城、伏見稲荷大社、嵐山などをそれぞれ班別に訪れ、2日目は、清水寺、銀閣寺と巡った後、NPO法人京都文化企画室にて日本舞踊・長唄三味線・着付けの体験をしました。ここでは、京文化の活性と次世代継承を目的に活躍されている一流の先生から直接指導を受けることができ、日本の文化を知る大変貴重な経験となりました。3日目には、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンで楽しい一日を過ごし、4日目は宝塚大劇場にて、星組の公演を鑑賞し、その華麗さと迫力に感銘を受けました。盛りだくさんの内容で充実した修学旅行となり、満面の笑顔とともに帰路につきました。

秋空の下、 明るくはじけた園児たちの笑顔

3つの附属幼稚園では、9月、10月にかけて秋の行事がにぎやかに実施されました。

穏やかな空の下、各園では遠足に出かけました。動物公園で小動物とのふれあいを楽しんだり、豊かな自然の中で元気いっぱい遊んだり、おうちの方やみんなでお弁当を囲むなど楽しいひと時を過ごしました。そして、みんながとても楽しみにしていたイベント“お芋ほり”も行い、一生懸命に掘り起こしたサツマイモを見せる、嬉しそうな園児たちの声があちらこちらから聞こえてきました。土の感触を楽しみ、収穫の喜びを味わえた貴重な経験となりました。

また、各園では運動会も開催され、これまで頑張ってきた組体操やダンス、チーム対抗リレーなどの競技を元気いっぱいに披露しました。練習の過程で大きく成長した園児たちは、先生から金メダルやトロフィーを受け取り大満足の様子でした。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

学校法人　武蔵野音楽学園

同窓生

市之瀬　允様　岡　ゆりか様　佐藤節子様　徳田ゆき様　本庄秀子様　水上由貴様　茂垣祥子様
大久保優美子様　菊地蝶子様　塩田京子様　戸田美樹子様　前嶋明子様　嶺　さくら様　吉﨑憲治様
大塚由季様　小倉佳絵様　髙橋寿奈様　林　秀樹様　松﨑　緑様　宮原和子様　熊本女声合唱さや一同様

在学生・同ご父母

梅澤則子様　岸野真弓様　佐藤 弘様　髙橋伸夫様　間瀬眞行様

役員・教職員・一般・他

石井牧子様　小倉多美子様　須田　寛様　関根弘美様　田代愼之介様　塚田雄二様　堀内康雄様　本庄　忍様　横地千鶴子様

（他に匿名を希望される方22名）

※ご芳名（五十音順）は、2022年7月1日から11月30日までにご寄附いただいた方々です。
それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。
※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

名　称	内　容	氏　名
埼玉県 令和４年度「下總皖一音楽賞」	音楽文化貢献部門 受賞	福井直昭（本学学長・附属高等学校校長）
防衛省	陸上幕僚長より感謝状を授与される（2022年11月18日）	池田一秀（1978年修士修了・作曲）
東京交響楽団	オーボエ奏者として入団（2022年10月）	浦脇健太（2015年大学卒業・オーボエ）
第91回日本音楽コンクール	オーボエ部門 第2位	神農広樹（2015年大学卒業・オーボエ）
	声楽部門 入選	程　音聡（博士1年・声楽）
第31回日本ドイツ歌曲コンクール	第1位、審査員特別賞、文部科学大臣賞 ドイツ連邦共和国大使館賞	山本将生（2018年修士修了・声楽）
第14回イタリアコンコルソMusic Arte	ステッラ部門 プロフェッショナルの部 声楽 金賞	山﨑陶子（2005年修士修了・声楽）
	ステッラ部門 学生の部（大学院）ピアノ 金賞	大友麻里亜（修士1年・ピアノ）
第2回国際声楽コンクール東京	大学生部門 第2位	上田　駆（大学2年・声楽）
第5回東京国際マリンバコンクール	第2位（1位なし）	牧田義伸（大学3年・打楽器）
第18回ルーマニア国際音楽コンクール	打楽器部門 第3位（1位なし）	牧田義伸（大学3年・打楽器）
第16回ベーテン音楽コンクール	弦楽器部門 自由曲コース 一般Aの部 第2位	青山真梨花（2022年修士修了・チェロ）
第52回フランス音楽コンクール	声楽部門 第3位、月刊「音楽現代」賞、山田 忍記念賞	小林香奈（2016年修士修了・声楽）

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。掲載は順不同、敬称略、学年は受賞時のものです。

オープンキャンパス・学校説明会＆体験レッスン

オープンキャンパス

開催日	主な実施内容	会場
3月25日㊏	ガイダンス（大学案内）、体験レッスン、学生によるコンサート、キャンパスツアー、体験授業、進学相談、保護者説明会、附属高等学校説明会	武蔵野音楽大学 江古田キャンパス
5月14日㊐		
6月18日㊐		
7月16日㊐		

学校説明会＆体験レッスン

開催日	開催地	会場
5月21日㊐	山梨県甲府市	甲府市総合市民会館 芸術ホール
5月21日㊐	愛知県名古屋市	日響楽器 池下店
5月28日㊐	福島県いわき市	いわき芸術文化交流館（いわきアリオス） 音楽小ホール
5月28日㊐	沖縄県那覇市	ともかぜ振興会館
6月　4日㊐	神奈川県横浜市	ミュージックアベニュー横浜
6月　4日㊐	静岡県静岡市	すみやグッディ SBS 通り店
6月10日㊏	広島県広島市	広島県民文化センター
6月11日㊐	長野県松本市	キッセイ文化ホール
6月25日㊐	北海道札幌市	ガイダンス会場：六花亭札幌本店きたこぶしホール レッスン会場：ヤマハ札幌センター
6月25日㊐	福岡県福岡市	アクロス福岡 イベントホール

●7月以降もオープンキャンパス、学校説明会＆体験レッスンを開催します。
※事前申し込みが必要です。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。
【お問合せ】武蔵野音楽大学 入学センター TEL.03-3992-2500
E-mail：nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

2023年 春期受験講習会

講習会名	日程	申込期間
大学受験講習会	3月27日㊊～3月29日㊌	2月　3㊍～ 3月13㊊
高校受験講習会	3月27日㊊・3月28日㊋	
会場		
武蔵野音楽大学　江古田キャンパス		

【要項請求】本学ウェブサイト内の「資料請求フォーム」からお申し込みいただくか、本学広報室（TEL.03-3992-1125）へお電話にてご請求ください。

【お問合せ】武蔵野音楽大学 入学センター
TEL.03-3992-2500
E-mail：nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

編集後記

前号と今号の2回にわたって掲載した宮城野親方（元横綱白鵬）と福井学長との対談には、我々に貴重な示唆を与えてくれる数々の発言がありました。相撲の土俵にも、音楽の舞台にも、喜怒哀楽のすべてがあり、真摯に向き合うことで本当の自分を知ることができる。親方にとって相撲がそうであるように、音楽を絶対のベース、木の根っことして、そのうえで自らの世界を拡げ、たくさんの花を咲かせることが大事である。

2023年もウィズコロナの生活がつづきそうですが、どんな状況でも自分を見失わず、前を向いて一歩ずつ着実に歩を進めたいものです（編）。

武蔵野音楽大学ウェブサイト　https://www.musashino-music.ac.jp/

Contents Vol.142 2023

1	ごあいさつ	理事長 福井直敬
2	巻頭　特別対談	夢心運――宿命と運命に彩られた相撲人生（後編） 宮城野親方（元横綱白鵬）× 福井直昭学長
8	楽器ミュージアムレター	コロナ禍における楽器ミュージアムの学芸員実習
	音楽の万華鏡	「日本音楽のピリオド楽器」　薦田治子
9	卒業生インタビュー	かけがえのない武蔵野での学びと出会い　神農広樹
11	Musashino News	グレッグ・ニェムチュク ピアノ・リサイタル オレグ・クリサ ヴァイオリン・コンサート＆公開講座 イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル 日々の研鑽が光った学生による3つのステージ 円光寺雅彦氏の指揮による管弦楽団演奏会 パワフルに華やかに、室内合唱団演奏会 吹奏楽の名曲を奏でたウィンドアンサンブル演奏会 3年ぶりに対面でミューズフェスティヴァル開催 ひとつひとつが今後の糧となった高校生たちの秋の行事 秋空の下、明るくはじけた園児たちの笑顔
14	Campus Information	武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等） オープンキャンパス・学校説明会＆体験レッスン 2023年 春期受験講習会

表紙の写真

本学ベートーヴェンホール、西側外観の夕景。2017年、全面的にリニューアルした江古田キャンパスの中で、唯一、大規模改修工事を施したうえで保存されたベートーヴェンホール。外観の一番の特徴である格子デザインの外壁はそのまま残され、その内側に設置した照明によって建物全体が美しく浮かび上がります。

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　〒176-8521 東京都練馬区羽沢１丁目 13-1　TEL. 03-3992-1121（代表）

入間キャンパス　〒358-8521 埼玉県入間市中神 728　TEL. 04-2932-2111（代表）

パルナソス多摩　〒206-0033 東京都多摩市落合 5-7-1　TEL. 042-389-0711（代表）

武蔵野音楽大学ウェブサイト https://www.musashino-music.ac.jp/

武蔵野音楽大学大学院 博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発行：2023年２月　学校法人 武蔵野音楽学園　通巻第142号